

元岡・桑原遺跡群
19

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

Motooka Kuwabara
元岡・桑原遺跡群19

—第9次・18次調査の報告3—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一一七二集

—1011—

2012

福岡市教育委員会

福岡市教育委員会

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

Motooka Kuwabara
元岡・桑原遺跡群19

—第9次・18次調査の報告 3—



遺跡略号：MOT9、MOT18
調査番号：9851、9946

2012

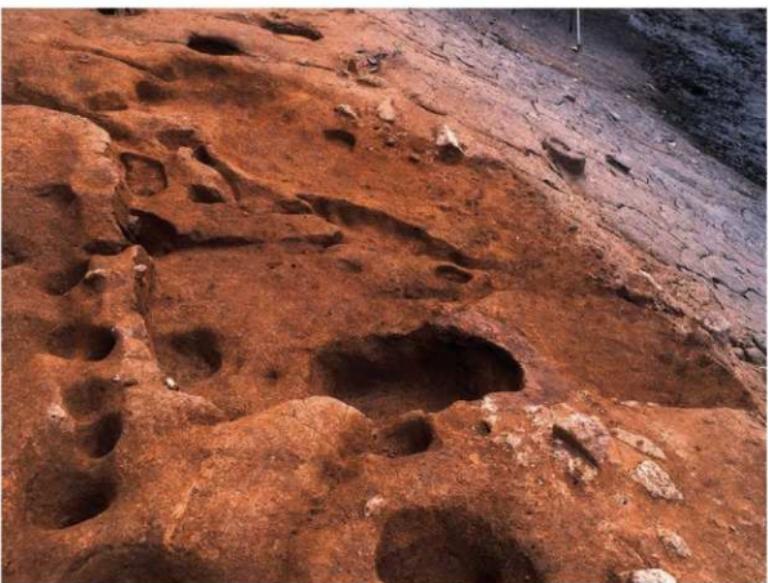
福岡市教育委員会



1. 1区第4面全景（南西から）



2. 東1群 SC389 (南から)



1. 東3群 SC309 (西から)



2. 西1群 SC314 (西から)



1. 古墳 SX271 (桑原古墳群 A群12号墳) (西から)



2. 石組遺構 SX430～431 (北から)



1. 編籠埋納遺構 SX389検出状況（東から）



2. 貝ピット SX276 検出状況（西から）並びに断面（北から）

序

福岡市は大陸に近く、いにしえより日本列島での社会や文化の形成に窓口としての役割を果たしてきました。こうした条件を生かし「アジアの交流拠点都市」を目指し、アジアの各地を繋ぐ学術・文化交流を進めています。

また、九州大学は「時代の変化に応じて自立的に変革し、活力を維持し続ける開かれた研究大学の構築」をコンセプトに、箱崎地区、六本松地区、原町地区的キャンパスを統合移転し、世界的レベルでの研究・教育拠点を創造するために福岡市西区元岡・桑原地区、糸島市にまたがる新キャンパスへの移転を進められています。

本市は九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うと共に、多核連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区の移転跡地や西部地域におけるまちづくりなど、長期的、広域的な視点から検討を行っています。移転予定地内の埋蔵文化財発掘調査は平成7年から開始しています。

本書は九州大学統合移転事業に伴い、平成10年から同14年に実施した元岡・桑原遺跡群9次調査と18次調査の成果を報告するものです。9次調査では弥生時代後期の特異な集落が発見され、18次調査では6世紀から8世紀代に及ぶ集落や大規模な倉庫群や製鉄炉、さらに中世の別所遺跡が発見されました。今回の18次調査の報告は3回目であり、大規模倉庫群の前史となる6世紀の集落についての報告です。本書が文化財保護への理解となり、学術研究の資料として活用頂ければ幸いです。

最後に調査にあたって協力頂いた九州大学と福岡市土地開発公社、同都市整備局、並びに元岡・桑原地区の方々をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成24年2月29日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

調査番号	調査次数	担当者	所在地	地図番号	調査期間	調査面積	遺跡の時代
9946	第18次	吉留	大字桑原字別所	桑原129	H11.10.10～H14.2.15	16,800m ²	旧石器～中世の集落・官衙遺跡生産跡
9851	第9次	松浦	大字元岡字池之浦	桑原129	H10.11.2～H10.12.10	190m ²	弥生時代の集落

例　言

- 1 本書は九州大学統合移転事業に伴い、福岡市教育委員会が1998年から2002年に行つた元岡・桑原遺跡群第9次調査並びに第18次調査の報告書である。本事業に係わる埋蔵文化財調査報告書としては19冊目である。
- 2 発掘調査並びに調査報告書作成は、九州大学統合移転地造成に伴い実施したものであり、福岡市土地公社からの委託事業として実施した。
- 3 本書で報告する元岡・桑原遺跡群は旧石器～中世の複合遺跡であり、遺跡略号は「MOT」である。本報告の調査次数は9次と18次であり、調査、整理、保管登録等についてはそれぞれ「MOT9」「MOT18」と表記される。
- 4 本書に使用した遺構実測図作成は長家伸、松浦一之介、小杉山大輔、西村直人、櫛山範一、石橋忠治、柴田知二、土井良伸、濱石正子、撫養久美子、水崎るい、吉留秀敏が行い、遺物実測図作成は大庭友子、小田裕樹、上方高弘、鳥井幸子、本村まゆみ、山崎賀代子、米倉法子、本村まゆみ、吉留が行った。トレースは菅波正人、森本幹彦、比嘉えりか、加集和子、吉留が行った。
- 5 本書に使用した座標は国土地標第Ⅱ系を基にしている。
- 6 本書に使用した写真は吉留が撮影した。空中写真については有限会社空中写真企画に撮影を委託した。
- 7 本書の執筆は2を森本幹彦・吉留秀敏、3-(4)を山崎純男、3-(5)を比佐陽一郎、その他を吉留秀敏が行い、編集は吉留秀敏が行った。
- 8 本報告書に関わる記録と遺物資料等は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに保管される。

目 次

1 はじめに	
(1) 元岡・桑原遺跡群の調査経過	1
(2) 元岡・桑原遺跡群のこれまでの調査成果	2
(3) 9次・18次調査の概要	6
(4) 調査の組織	7
(5) 調査工程と作業方法	8
(6) 18次調査区の調査の方法	8
2 第9次調査の記録	
(1) 概要	10
(2) 地形と基本土層	10
(3) 遺構と出土遺物	10
(4) 小結	13
3 第18次調査の記録 3	
(1) 概要	14
(2) 基本土層と遺構面	14
(3) 第4面の遺構と遺物	14
(4) 元岡遺跡群第18次調査区の自然遺物	90
(5) 元岡・桑原18次調査出土居木の保存処理と復元について	92
比佐陽一郎（文化財整備課）	

挿 図 目 次

Fig.1	元岡・桑原遺跡群位置図 (1/50,000)	1
Fig.2	元岡・桑原遺跡群調査地点位置図	2
Fig.3	9次・18次調査の位置 (明治33年)	6
Fig.4	18次調査区とグリッド配置図 (1/1,000)	9
Fig.5	9次調査地点の遺構検出状況 (1/200)	10
Fig.6	SC001と出土遺物 (1/60, 1/3)	12
Fig.7	SC002と出土遺物 (1/60, 1/3)	13
Fig.8	18次第4面遺構配置概念図 (1/1,000)	15
Fig.9	第4面東1群遺構配置図 (1/200)	17
Fig.10	竪穴式住居1 (1/60, 1/40)	20
Fig.11	第4面東2群遺構配置図 (1/200)	21
Fig.12	竪穴式住居2 (1/60)	22
Fig.13	竪穴式住居3 (1/60)	23
Fig.14	竪穴式住居4 (1/60)	24
Fig.15	第4面東3群遺構配置図 (1/200)	25
Fig.16	竪穴式住居5 (1/60)	26
Fig.17	第4面西1群遺構配置図 (1/200)	27
Fig.18	竪穴式住居6 (1/60)	28
Fig.19	竪穴式住居7、掘立柱建物 (1/60)	30
Fig.20	古墳 SX271 (桑原古墳群A群12号墳) (1/60)	31
Fig.21	石組遺構 SX431,432 (1/60)	32
Fig.22	その他の遺構 (1/20, 1/10)	33
Fig.23	竪穴式住居出土遺物1 (1/3)	34
Fig.24	竪穴式住居出土遺物2 (1/3)	35
Fig.25	掘立柱建物出土遺物 (1/3)	36
Fig.26	古墳 SX271 (桑原古墳群A群12号墳) 出土遺物 (1/3)	36
Fig.27	編籠埋納遺構 SX289 出土遺物 (1/3)	37
Fig.28	編籠埋納遺構 SX289 周辺出土遺物 (1/3)	38
Fig.29	貝ピット SX276,277 出土遺物 (1/3)	38
Fig.30	石組遺構 SX431,432 出土遺物 (1/3)	39
Fig.31	その他の遺構出土遺物1 (1/3)	40
Fig.32	その他の遺構出土遺物2 (1/3)	41
Fig.33	包含層 SX404 北部 (5~8区) 出土遺物1 (1/3)	42
Fig.34	包含層 SX404 北部 (5~8区) 出土遺物2 (1/3)	43
Fig.35	包含層 SX404 北部 (5~8区) 出土遺物3 (1/3)	44
Fig.36	包含層 SX404 中部 (1~4区) 出土遺物1 (1/3)	45
Fig.37	包含層 SX404 中部 (1~4区) 出土遺物2 (1/3)	46
Fig.38	包含層 SX404 中部 (1~4区) 出土遺物3 (1/3)	47
Fig.39	包含層 SX404 中部 (1~4区) 出土遺物4 (1/3)	48
Fig.40	包含層 SX404 中部 (1~4区) 出土遺物5 (1/3)	49

Fig.41	包含層 SX404 中部（1～4 区）出土遺物 6 (1/3)	50
Fig.42	包含層 SX404 中部（1～4 区）出土遺物 7 (1/3)	51
Fig.43	包含層 SX404 南部（9～12 区）出土遺物 1 (1/3)	52
Fig.44	包含層 SX404 南部（9～12 区）出土遺物 2 (1/3)	53
Fig.45	包含層 SX404 南部（9～12 区）出土遺物 3 (1/3)	54
Fig.46	包含層 SX100 北部（G～I 区）出土遺物 1 (1/3)	55
Fig.47	包含層 SX100 北部（G～I 区）出土遺物 2 (1/3)	56
Fig.48	包含層 SX100 北部（G～I 区）出土遺物 3 (1/3)	57
Fig.49	包含層 SX100 北部（G～I 区）出土遺物 4 (1/3)	58
Fig.50	包含層 SX100 北部（G～I 区）出土遺物 5 (1/3)	59
Fig.51	包含層 SX100 北部（G～I 区）出土遺物 6 (1/3)	60
Fig.52	包含層 SX100 北部（G～I 区）出土遺物 7 (1/3)	61
Fig.53	包含層 SX100 北部（G～I 区）出土遺物 8 (1/3)	62
Fig.54	包含層 SX100 北部（G～I 区）出土遺物 9 (1/3)	63
Fig.55	包含層 SX100 北部（G～I 区）出土遺物 10 (1/3)	64
Fig.56	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 1 (1/3)	65
Fig.57	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 2 (1/3)	66
Fig.58	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 3 (1/3)	67
Fig.59	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 4 (1/3)	68
Fig.60	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 5 (1/3)	69
Fig.61	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 6 (1/3)	70
Fig.62	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 7 (1/3)	71
Fig.63	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 8 (1/3)	72
Fig.64	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 9 (1/3)	73
Fig.65	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 10 (1/3)	74
Fig.66	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 11 (1/3)	75
Fig.67	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 12 (1/3)	76
Fig.68	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 13 (1/3)	77
Fig.69	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 14 (1/3)	78
Fig.70	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 15 (1/3)	79
Fig.71	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 16 (1/3)	80
Fig.72	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 17 (1/3)	81
Fig.73	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 18 (1/3)	82
Fig.74	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 19 (1/3)	83
Fig.75	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 20 (1/3)	84
Fig.76	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 21 (1/3)	85
Fig.77	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 22 (1/3)	86
Fig.78	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 23 (1/3)	87
Fig.79	包含層 SX100 中部（D～F 区）出土遺物 24 (1/3)	88
Fig.80	古代鞍の部分名称（末崎 1992 より）	92

図版目次

巻頭図版 1

1. 1区第4面全景（南西から）
2. 東1群 SC389（南から）

巻頭図版 2

1. 東3群 SC309（西から）
2. 西1群 SC314（西から）

巻頭図版 3

1. 古墳 SX271（桑原古墳群A群12号墳）（西から）
2. 石組遺構 SX430～431（北から）

巻頭図版 4

1. 編籠埋納遺構 SX389 検出状況（東から）
2. 貝ピット SX276 検出状況（西から）並びに断面（北から）

PL.1 X線CTで得られた画像の展開図（元データは九州国立博物館提供）	100
PL.2 保存処理後の資料（裏面と表面を合成したもの）	101
PL.3 X線CTの操作画面	101
PL.4 三次元成形で得られた複製（右）とそれを型取りして作られた複製品（左）	101
PL.5 復元の工程（設置角度の検討と前輪、後輪の基部の作成状況）	101
PL.6 復元品の完成状態	101
PL.7 同左	101

表目次

表1 元岡・桑原遺跡群調査一覧	4
表2 18次調査出土貝類資料個体数分類表	90

1 はじめに

(1) 元岡・桑原遺跡群の調査経過

平成 6 年度から開始した九州大学統合移転地内の元岡・桑原遺跡群の発掘調査は 2011 年度までに 56 次調査に達し、調査開始後 18 年目となった。もちろん発掘調査以前から埋蔵文化財の保存業務は始められており、これまでに実施した九州大学移転に関係し、実施した埋蔵文化財に係る業務は、事前協議、踏査、試掘、発掘調査などがある。このうち試掘以前に重要地区として敷地内の緑地として保存された地区は古墳、中世山城（表 1 参照）などがある。また試掘調査を受けて保存協議を行い、設計変更などで保存したのは瓜尾貝塚地区（28 次）などがある。さらに発掘調査の結果、重要性が把握され協議のうえ、全面あるいは一部が保存された調査地区としては、金屎古墳や 7、13、15、20、27、36 次などがある。これ以外に開発行為で破壊される埋蔵文化財の範囲については発掘調査による記録保存として対応している。なお、本移転地内における福岡市土地開発公社による文化財保護法第 92 条による発掘調査は、平成 20 年度に終了した。その後、2009 年度以降は九州大学からの委託による文化財保護法第 93 条による発掘調査を進めているが、こうした経緯により九州大学統合移転地内に常駐する福岡市埋蔵文化財第 2 課職員は 1 名減員となり、発掘調査をはじめとする埋蔵文化財保護業務は担当職員 1 名で対応することになった。



Fig.1 元岡・桑原遺跡群位置図 (1/50,000)

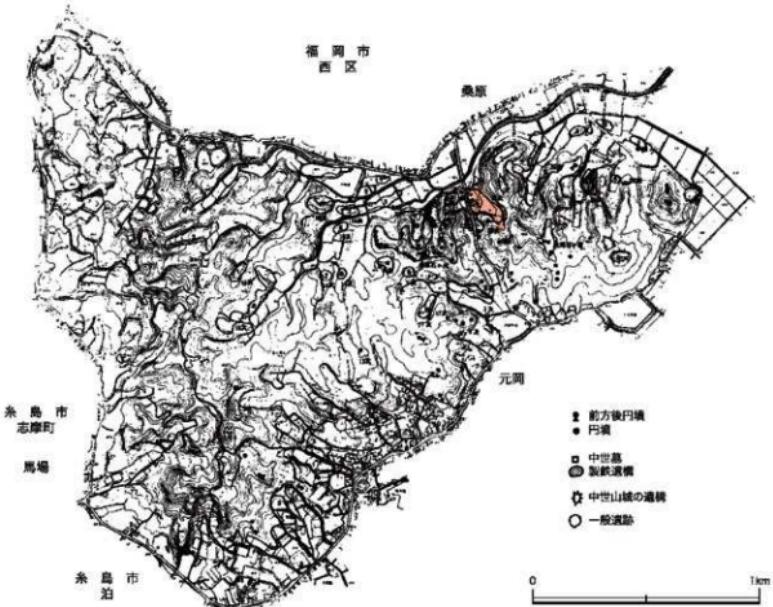


Fig.2 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図

(2) 元岡・桑原遺跡群のこれまでの調査成果

元岡・桑原遺跡群は玄界灘に突出した糸島半島の基部に位置し、福岡市西区大字元岡と同大字桑原にまたがる丘陵地帯に分布する遺跡群の総称である。遺跡の立地する丘陵は第三紀後葉に形成された早良花崗岩を基盤とし、高さは標高100m前後を頂部として樹枝状の浸食谷が地形を複雑にしている。遺跡群の東～南側は現在広い水田耕地となっているが、古代から中世までは今津湾が深く入り込み、遺跡近くまで迫っていた。これが古墳時代以降の埋積と近世以降の干拓事業により陸化したものである。本地域の遺跡は、近年まで縄文時代の瓜尾貝塚（県指定史跡）と少数の古墳が知られているのみであったが、平成7年以降に開始した九州大学統合移転用地の事前確認調査の結果、新たに各時代に及ぶ多数の遺跡が発見された。

糸島半島を中心とした歴史的景観を概観すると、北部九州の中での特異な様相を見ることができる。

まず旧石器時代から縄文時代早期の遺跡は、主に山際の丘陵上～段丘面上、その斜面に多数分布し、周辺地域と同様に狩猟採集活動の痕跡を見せる。本遺跡群では2、3、7、10、15、18、20、22、24、27、28、36、42、48、49、50、51、52、53、54次など20地点でこの時期の遺構や遺物が出土している。遺跡数は多いが大まかに後期旧石器時代後葉のナイフ形石器段階と旧石器時代終末期～縄文時代草創期に遺跡が増加する傾向がある。早期後半から前期に遺跡は乏しくなり、縄文時代後半になると遺跡は再び増加する。旧今津湾と関わる瓜尾、飛櫛貝塚等が現れるのもこの時期で

ある。貝塚は北部九州では稀な存在であるが、この旧今津湾と旧遠賀湾地域に多く分布している。なお本遺跡群の北側に位置する大原遺跡では縄文時代後～晩期の焼畑遺構が報告され、この段階には初期畑作農耕の普及が進んでいた可能性も考えられる。

また、大原遺跡や瓜尾貝塚（28次地点）、20次地点はそれぞれ腰岳産黒曜石類の原石や石核、剥片類が多く出土し、黒曜石等の北部九州の石材供給起点となっている。糸島半島を介し玄界灘沿岸を広域に結ぶ海上交易が存在したことが推定されている。本遺跡群では28次地点で瓜尾貝塚の延長部の貝層や黒曜石原石埋納遺構が確認されたほか、52次で並木式（中期）、2次で船元式（中期）や広田式（晩期）、7次で坂の下式（後期）、15、18次で阿高式（後期）、42次で黒川式、土器などが出土している。

弥生時代前期になると水稻農耕が普及し、今津湾に浮かぶ今山に产出する玄武岩を素材とする大型石斧類の集約的生産が開始される。この石斧は開墾や木材確保の主要具として、北部九州から中九州まで広い供給圏を形成する。今津湾岸では縄文時代から継続する剥片石器の交易と併せて、関連する小規模遺跡が多く形成されている。本遺跡群周辺では弥生時代初期の遺物は少なく、水稻農耕の導入はやや遅れるが、前期末から中期には多くの集落遺跡の形成が認められる。本遺跡群では3次地点で小規模な集落が確認されているほか、2、7、15、20、42、52次地点で多くの遺物や遺構が発見されている。42、52次地点では、前期の小規模集落が中期には大規模化し、前面の谷部包含層から多量の土器、木器の他、無文土器や鋳造遺構、鋳型片、金属器などが出土している。この段階には、「魏志倭人伝」に記される伊都国の中枢部と比定される三雲、井原遺跡などの港湾地域として朝鮮半島との交流が本格化したことが推定される。

弥生時代後期以降になると今津湾周辺では今宿五郎江遺跡や大塚遺跡を中心に大規模な環濠集落が形成され、農業、漁業関連遺物と共に朝鮮半島や国内各地との交易を示す土器、陶質土器や金属器類、玉類が多く出土する。2、9、20、27次地点で後期中葉～末葉の遺構、遺物が確認されているほか、42、52次地点ではこの時期の多くの掘立柱建物と共に鏡、小銅鐸や貨泉、五朱錢や半島系土器、また山陰、瀬戸内地域の遺物が出土している。本地域の集団が引き続き広範囲な交易にも従事していた事が予測されている。

古墳時代前半期には今山遺跡などで製塩活動も認められる。周辺では海浜を中心に漁業や交易に関わる集落遺跡が分布する。その中で本遺跡群の丘陵頂部には塩除古墳、池ノ浦古墳、峰古墳など、本地域では大型の前方後円墳が多数築造されている。

古墳時代後半期には、石ヶ原古墳など引き続き大型の前方後円墳が築造されるとともに、群集墳の築造や集落の増加が著しい。群集墳の副葬、供獻品には装饰太刀などの下賜品や、鍛冶工具や陶質土器など初期の製鉄関連遺物や朝鮮半島からもたらされた文物がある点は注目される。この時期の集落は丘陵の縁辺や狭長な谷部にも広く展開し、糸島半島の広域に急激な人口増加が予測される。近年こうした特殊な様相の背景には、大和朝廷による対外政策との関連が指摘されている。『日本書紀』推古10（602）年に、撃新羅將軍に任命された来目皇子が二万五千の兵を嶋郡に駐屯させたが、嶋郡において来目皇子の急逝により遠征は中止されたとの記事がある。こうした軍事的緊張が古墳時代後期から末にかけての本地域での集落の著しい増加をもたらした背景と関連づける見解も示されている。

古代には、糸島半島は嶋（志麻）郡に属し、登志、川辺、韓良、明敷、久米、加夜、志麻、鶴永の八郷に分かれていたが、本遺跡群が該当する郷は現時点では不明である。また、国内最古である大宝二（702）年の嶋郡川辺里戸籍の存在、古代鉄生産の記録などは本地域の重要性を改めて伺うことが

遺 墓 名	位置	記載者	開口開始日	開口終了日	古墳名	調査年	被用 材 横	調査後の状況	出土 貨	
水 井 京 第	近畿	田代	大字元岡町	H10.1.13	H10.10.31	新時代	新時代	新時代のみ	縄文器	
第 662 第 1 次 元岡・佐原跡	近畿	池田・小林	大字元岡町	H10.1.13	H10.10.31	古墳時代	古墳時代	古墳時代のみ	縄文器	
第 665 第 1 次 美原石子山古墳	近畿	池田	大字元岡町石子山	H10.1.11	H10.10.31	30	H1.54	古墳時代	3~8世紀、南竈(19)	
第 667 第 1 次 美原金谷山古墳	近畿	久住	大字元岡町金谷	H10.8.20	H11.11.29	1	500	古墳時代	前方後円墳、斜面式木棺	
第 668 第 1 次 元岡石子山古墳	近畿	池田・佐藤	大字元岡町石子山	H10.8.27	H11.11.29	1	1,280	古墳時代	全長10.5m、斜面式木棺	
第 669 第 2 次 公社 久住	大字元岡町石子山	H11.1.11	H11.12.5	3,007	古墳時代	斜面式木棺	斜面式後造	3	縄文器	
第 670 第 3 次 公社 久住	大字元岡町石子山	H11.1.19	H11.2.23	1	3,500	古墳時代	斜面式木棺	3	縄文器	
第 674 第 3 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H10.12.1	H10.3.31	1,219	古墳時代	古墳時代	斜面式後造	144	縄文器	
第 771 電線溝 元岡古墳群 2号	近畿	田代	大字元岡町石子山	H9.11.10	H9.11.28	60	古墳時代	古墳時代	5	縄文器
第 811 第 1 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H10.4.27	H10.6.25	2,500	古墳時代	古代JIS・復作調	調査後造	1	縄文器	
第 812 第 2 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H10.6.30	H10.8.28	2,800	古墳時代	古墳時代合宿	調査後造	1	縄文器	
第 813 第 2 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H10.5.6	H11.6.11	7,600	古墳時代	古墳時代	保有	530	縄文器	
第 829 第 2 次 元岡古墳群 3号	近畿	池田	大字元岡町石子山	H10.9.18	H10.12.25	1	300	古墳時代	円錐	調査後造
第 831 第 3 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H10.12.10	H10.12.10	190	古墳時代	古墳時代	調査後造	1	縄文器	
第 834 第 10 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H11.1.8	H11.2.25	1,336	古墳・平安	古墳・平安	調査後造	1	縄文器	
第 835 第 13 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H11.5	H11.3.20	1,650	古墳時代	古墳時代・山古墳・包装材	調査後造	8	和銅器	
第 993 第 12 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H11.5	H12.3.28	5,500	古墳時代	古墳時代	保有	326	縄文器	
第 993 第 13 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H11.4.2	H12.3.16	3	600	古墳時代	古墳時代 1年、内鉢2年、鐵	調査後造	5	縄文器
第 994 第 14 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H11.4.22	H11.7.22	1,200	古墳	古墳時代	調査後造	1	縄文器	
第 992 第 15 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H11.5.11	H11.9.28	3,500	古墳	古墳時代、木棺、中軸式回	保有	80	縄文器	
第 993 第 16 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H11.8.2	H11.11.10	1,200	古墳時代	古墳時代	調査後造	1	縄文器	
第 994 第 17 次 元岡古墳群 4号	近畿	池田	大字元岡町石子山	H11.9.10	H11.12.6	8	517	古墳時代無鉢	円錐	調査後造
第 946 第 18 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H11.10.10	H12.4.15	16,800	古墳	古墳時代	調査後造	1100	縄文器	
第 947 第 19 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H11.10.16	H11.12.15	3,000	古墳	古墳時代	調査後造	1	縄文器	
第 901 第 20 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H12.4.5	H15.5.25	20,130	古墳	古墳時代	調査後造	15,000個	縄文器	
第 902 第 21 次 石子山内蔵跡・後方遺構 佐原	近畿	大字元岡町石子山	H12.9.15	H12.9.21	3	3,170	古墳時代	古墳時代	15,000個	
第 903 第 22 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H12.4.10	H12.10.25	4,750	古墳	古墳時代	調査後造	4	縄文器	
第 919 第 23 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H12.6.1	H13.3.31	8,110	古墳	古墳時代	調査後造	7,000個		
第 934 第 24 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H12.8.21	H13.8.20	5,600	古墳	古墳時代	調査後造	4,000	縄文器	
第 952 第 25 次 美原山古墳群 A層	近畿	田代	大字元岡町石子山	H11.2.14	H11.3.10	7	2,200	古墳時代	円錐	調査後造
第 910 第 26 次 公社 二葉	大字元岡町石子山	H13.4.5	H13.11.30	1	5,487	古墳時代・古墳	古墳時代・古墳時代、円錐、古墳	保有 4,420個	1	縄文器
第 183 第 27 次 公社 二葉	大字元岡町石子山	H13.12.1	H14.8.20	4,650	古墳時代	古墳時代	調査後造	10,000個	縄文器	
第 194 第 28 次 公社 二葉	大字元岡町石子山	H14.2.1	H14.7.4	2,200	古墳	古墳時代	調査後造	3	和銅器	
第 904 第 29 次 元岡古墳群 B層	近畿	田代	大字元岡町石子山	H14.4.5	H15.9.30	11	4,500	古墳時代	円錐	調査後造
第 920 第 30 次 公社 二葉	大字元岡町石子山	H14.8.1	H14.9.30	2,450	古墳	古墳時代	調査後造	0	縄文器	
第 942 第 31 次 九十九石・上・大字元岡町石子山	近畿	田代	大字元岡町石子山	H15.4.1	H18.1.13	10,200	古墳・古墳	古墳・古墳・古墳時代	調査後造	1,200個
第 937 第 32 次 九十九石	近畿	田代	大字元岡町石子山	H15.1.20	H15.3.31	1,700	古墳	古墳のみ	0 不要	
第 930 第 33 次 美原山内蔵跡・後方遺構 佐原	近畿	田代	大字元岡町石子山	H15.8.8	H15.11.1	1	450	古墳時代	古墳時代のみ	調査後造
第 931 第 34 次 元岡古墳群 1層	近畿	田代	大字元岡町石子山	H15.8.11	H15.8.12	3	1,200	古墳時代	古墳のうち1基は同じ石室で、他の2基は別の石室	調査後造
第 940 第 35 次 石子山内蔵跡	近畿	田代	大字元岡町石子山	H15.8.11	H15.8.20	1	1,853	古墳時代	古墳時代	調査後造
第 341 第 36 次 美原山古墳	近畿	田代	大字元岡町石子山	H15.9.1	H17.3.31	1	3,600	古墳時代	近傍大河川・中古墳墓群	保有
第 935 第 37 次 元岡山體感の森	近畿	田代	大字元岡町石子山	H15.10.22	H16.2.25	4	461	古墳時代	古墳免許、馬鹿穴跡	調査後造
第 371 第 38 次 美原山古墳群 A層	近畿	田代	大字元岡町石子山	H16.3.8	H17.1.17	1,000	古墳	古墳時代	その他の施設	調査後造
第 949 第 39 次 美原山古墳群 B層	近畿	田代	大字元岡町石子山	H16.4.5	H16.4.16	880	古墳時代中期	古墳	調査後造	
第 940 第 40 次 九十九石	近畿	田代	大字元岡町石子山	H16.4.7	H16.4.30	1,000	古墳時代	古墳	調査後造	
第 935 第 41 次 九十九石	近畿	田代	大字元岡町石子山	H16.5.7	H18.2.17	936	古墳時代	古墳時代	調査後造	
第 941 第 42 次 九十九石・下	近畿	田代	大字元岡町石子山	H16.1.11	H21.3.30	5,000	古墳時代	古墳時代、古墳、古墳免許、奈良県史跡	保有	
第 948 第 43 次 元岡古墳群	近畿	田代	大字元岡町石子山	H17.2.7	H17.3.8	39	古墳時代	古墳免許、その他の施設	調査後造	
第 923 第 44 次 九十九石・下	近畿	田代	大字元岡町石子山	H17.6.1	H17.10.20	1,180	古墳	古墳時代	1,200個	調査後造
第 935 第 45 次 美原山内蔵跡 A層	近畿	田代	大字元岡町石子山	H17.2.20	H17.11.22	3	1,228	古墳時代	古墳	調査後造
第 938 第 46 次 九十九石・上	近畿	田代	大字元岡町石子山	H17.8.8	H17.10.11	403	古墳・平安	古墳	調査後造	
第 962 第 47 次 磐古墳	近畿	田代	大字元岡町石子山	H18.6.5	H18.3.10	1	107	磐古墳	磐古墳	調査後造
第 953 第 48 次 田代	大字元岡町石子山	H18.1.10	H18.2.25	447	古墳・古墳	磐古墳	調査後造	17	縄文器	
第 961 第 49 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H18.4.3	H19.3.22	2,723	古墳・古墳	磐古墳	調査後造	55	縄文器	
第 939 第 50 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H19.4.1	H19.5.27	511	古墳	磐古墳	調査後造	44	縄文器	
第 941 第 51 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H19.8.29	H20.10.3	6,888	古墳・古墳	古墳時代	調査後造	275	縄文器	
第 963 第 52 次 九十九石	近畿	田代	大字元岡町石子山	H20.10.6	H21.6.15	1,872	古墳	古墳時代物語	保有	
第 944 第 53 次 公社 田代	大字元岡町石子山	H21.6.14	H22.1.11	2,200	古墳	古墳時代	調査後造	53	縄文器	
第 955 第 54 次 元岡内蔵跡 C層	近畿	田代	大字元岡町石子山	H21.2.14	H22.1.11	3,000	古墳	古墳時代	1,000個	調査後造
第 945 第 55 次 九十九石・上	近畿	田代	大字元岡町石子山	H22.6	調査中	3	8,920	古墳	古墳	調査後造
第 1103 第 56 次 九十九石	近畿	田代	大字元岡町石子山	H22.4.12	調査中	38	古墳	古墳時代	中古墓	調査後造
第 1110 第 58 次 九十九石	近畿	田代	大字元岡町石子山	H22.8	調査中	中古	中古	中古	中古	調査後造

表 1. 元岡・桑原遺跡群調査一覧

出来る。本遺跡群ではこれまで古代の木簡が7、15、20次の3地点で発見されている。今18次調査でも1点の木簡と墨書き土器などが出土した。こうした状況から個別調査地点の性格と共に、この地域全体の歴史的動向を踏まえての調査、検討が望まれるのである。

古代末にはこの地域は安楽寺領桑原庄となる。『安楽寺草創日記』には、康和二（1100）年に桑原の莊園領地三十町を寄進したとの記載がある。また、本地域には、志摩郡、怡土郡を中心に広大な莊園を形成する法金剛院領怡土庄が成立する。今津湾は多くの貿易船が出入りする外港として平安時代末になると著しく栄えている。「今津」の名称も、博多津に対しての、新たな今「津」と呼ばれたことから生まれた地名とも言われている。今津のおもな港湾施設は湾西側の毘沙門山南麓にあり、現在の今津本町から浜崎町付近の海浜部と考えられる。今津湾から南宋に二度渡海した著名な禪僧栄西が関わる誓願寺は現在も当地に所在している。また周辺には勝福寺や今津古墓など日宋貿易に関わる寺社や遺跡が多く分布する。平安時代末から中世前期にはこれらの寺社を中心に貿易の富に恵まれ「今津千軒」と呼ばれるほどに港湾都市として発展していた。残念ながら一帯の考古学的調査は進んでいないが、今津B遺跡では山麓斜面に誓願寺の僧坊に関わる遺構群が発見され、隣接する今津C遺跡では、海浜の砂丘上に礎石建物や瓦、輸入陶磁器などが発見されている。

さて、本地域に關係する中世文書のなかで、觀応元年（1350）の足利尊氏充行状案（有浦文書『南北朝遺文』二八四五）に、「筑前国本岡城郭、志登社領家、同地頭職を松浦佐志源藏人披を充行う」とあり、「本岡城郭」の存在が記されている。この点に検討を加えた服部秀雄氏は、この城郭の重要性を示しつつ南北朝期の段階に完成された本格的な城郭となっていないのではないかと見ていく。「本岡城郭」の比定地は現時点では不明である。考古学的には、現在の元岡集落の西側隣地で行われた46次調査A区で11～15世紀に及ぶ集落跡が確認されており、中世元岡集落の一部と見られた。また、周辺の踏査で字馬場に隣接する八坂神社東側の畠地等で13世紀前後の陶磁器類が採集されている。この八坂神社から東側一帯は丘陵を分断し、低平ではあるが段状造成（郭か）の痕跡がある。中世元岡集落の前面にあり、旧今津湾に迫り出したこの場所は、字「馬場」の存在からみても「本岡城郭」の候補地の一つと考えられる。

18次地点は元岡集落から桑原集落へ向かう大坂越えの路線沿いにあり、今津港の西方約3.5kmに位置している。本遺跡から今津港は戸山の山陰となり直接には眺望できない。しかし大原川から外海への流路付け替えが行われた明治元（1868）年以前の幸川は、直接今津湾に注いでおり、川沿いに下るなら小舟などで短時間に直接連絡できる位置にあった。こうした点からも周辺の中世集落の形成と展開は、今津港の発展と無関係ではないと考えられる。18次調査区における中世集落の成立については前回報告文に詳述したが、急峻な戸山の西斜面に壇状の平坦面を複数造成し、小規模な建物や井戸などが設けられていた。谷部中央には狭く小規模な水田面も造営されていたが、生産量も限られたこの場所での自立經營体とは考え難く、莊園領主である寺院の支配下に成立した「別所」集落と類推した。この「別所」集落の変遷は、近隣に推定される「今津別所」とともに中世今津港の発展と関連しているとも考えられる。

中世後期には大友氏による博多支配とともに志摩郡へも介入が広がる。糸島半島東部で博多湾を見下ろす柑子岳城を中心山城とし、多数の枝城が造られる。本遺跡群には戸山城、水崎城、志摩野城などがある。18次調査区は戸山城の西側裾部にあたり、道路状遺構SX204がこの谷から斜面を経由して戸山城、水崎城に連なる尾根線に向かっていることから、桑原集落側からの登城ルートとして設けられた可能性がある。

近世になると今津は糸島地域の年貢積出港など廻船業を主とする浦分となり、再び漁業を始めるな

ど衰退の途を辿る。周辺でも貿易に関連する発展は途絶え、漁業・農業への依存を高めていく。慶安（1648～1652）年間から溜池の築造が始まり、また寛文5（1665）年からは今津湾の干拓事業が開始される。

（3）9次、18次調査の概要

第9次調査地点は、大坂池の南側丘陵の先端付近に位置する遺跡である。現元岡集落の北縁部に位置する。丘陵は東側の干拓地、すなわち旧今津湾に向かって、細く伸び、花崗岩を基盤とした現在幅5～10m、長さ約80m、標高約45～35mで比高差8～15mの丘陵部である。平成7（1995）年度に実施した九州大学統合移転地内の分布・確認調査の際に丘陵上に点在する花崗岩角、亜円礫などの存在から数基の古墳が分布すると推定された地点であった。しかし、現状は1960年代からの蜜柑園造成と、1970年代から行われたという花崗岩真砂土採掘工事により、旧地権境界の尾根部を残して周囲は垂直に近い崖壁状となしており、危険なため容易に近寄ることも、試掘することも困難となっていた。しかし、今後長く放置しておくことも遺跡の保全上厳しく、早急に記録調査することが望ましいと考えられた。

発掘調査は平成10（1998）年11月2日から年度内に完了を目指し開始した。丘陵上は雑木林や孟宗竹が著しく繁茂していた。調査開始にあたってそうした林木の伐開作業が必要となり、人力での作業を行った後に、調査を開始した。調査後まもなく、尾根東側に花崗岩角、亜円礫とそれが落ち込む土坑を確認した。しかしそれらは方形土坑に陶製大甕が埋設され、周囲に戒名が認められる角礫があり、近世墓とその墓標と判明した。この尾根先端付近をI区とし、尾根の後背部をII区として調査を進めたが、何れも想定されていた古墳ではなく、特にII区では何らの遺構、遺物がなく、I区で保存状況の悪い竪穴式住居が2棟検出されたのみであった。住居の床面は極めて浅く、すぐに基盤の花崗岩礫乱土に達した。また、基盤に幾筋かの浸食による亀裂も発生していた。こうした状況から丘陵上は近代の真砂土採掘以前に近代墓築造だけでなく、幾度かの削平や伐開が行われたと考えられる。調査は予定期間より早まったが、1ヶ月強を要し、平成10（1998）年12月10日に終了した。

第18次調査地点は、平成7（1995）年度に実施した九州大学統合移転地内の確認調査の結果、B区5地点で新たに確認された遺跡である。福岡市西区大字桑原字別府（別所）に所在する。遺跡は桑原（大原）川の南岸にあり、北西に開口する狭い谷地形の範囲である。遺跡のすぐ東側は柏子岳の支城とされる中世山城の戸山城があり、その南麓斜面を含んでいる。現在の桑原集落の川を挟んで南側に位置する。確認調査では谷部内への数ヶ所のトレンチ調査の結果、2～3mに達する深い理土下



Fig.3 9次・18次調査の位置（明治33年、1/10000）

に、炉、柱穴、鉄滓等が確認されたことから、当初は小規模な製鉄関連遺跡と予測された。しかし、既に第7次、13次発掘調査などで、本地域の谷部に展開する古代製鉄関連遺跡の大規模性が明らかとなり、かつ重要性が認識されていたので、この調査区でも調査開始時には広範囲で、大規模な重層的遺跡の存在も想定されていた。

発掘調査は平成11(1999)年10月10日から開始した。当初は調査面積約14,000m²を想定し、谷部は近年に放置された田畠と住宅、倉庫撤去後に草類主体の荒れ地となっていたが、斜面に近づくと雜木林や孟宗竹林が著しく繁茂していた。調査開始にあたってそうした林木、竹林の伐開作業が必要となり、人力での作業を行った後に、重機による掘削作業を開始した。

作業実施にあたっては発掘時の排土処理と、長期に及ぶ調査期間中の遺跡保全、また担当調査員が1名であったための調査限界と安全管理のために、谷部全体を上流域(調査1区)と下流域(調査2区)に大きく二分し、順次発掘を進める事とした。また、調査2区に隣接する一般県道桜井太郎丸線道路拡幅範囲については調査3区とし、調査2区と併行して発掘を進めた(調査3区は第910集掘査済み)。また、調査1区の発掘の結果、遺跡の範囲がさらに未試掘の谷最上流部の小支谷まで広がることが判明したために、その範囲を調査4区として調査2、3区作業終了後に追加調査した。

調査が進むと遺跡は未確認の地下5m以下の谷底や急斜面の上部まで及び、当初の推定より広範囲に広がった。谷底までの包含層からはコンテナケース1,000箱を超える豊富な古代遺物や木簡、多量の木製品、魚骨、貝殻類などの有機質遺物や鉄滓、炉壁等の製鉄関連遺物が出土した。最終的に調査面積は約16,800m²となり、谷部中央では弥生時代から中世に及ぶ5面の遺構面を検出し、およそ二年四ヶ月の調査期間を要して平成14(2002)年2月15日に終了した。

なお、調査期間中に戸山城を挟んで東西で同時に調査を進めていた20次調査と同時開催で記者発表を行い、併せて現地説明会を2000年10月28日土曜日に開催した。当日はおよそ300名の見学者が訪れた。

(4) 調査の組織

調査委託者 福岡市土地開発公社

調査主体 福岡市教育委員会

教育長 山田裕嗣 植木とみ子・生田征生・町田英俊・西憲一郎(前任)

文化財部長 矢野三津夫 山崎純男・堺徹・柳田純孝・平塚克則・後藤直(前任)

調査庶務 文化財整備課長(現管理課長) 櫻本芳治 上村忠明・平原義行(前任)

管理係長 白川国俊 栗須ひろ子・市坪敏郎・井上和光(前任)

管理係 柿替美香 烏越由紀子・鈴木由喜・岩屋淳美・中島圭(前任)

調査担当 大規模事業等担当(現埋蔵文化財第2課) 主査 吉留秀敏

課長 田中嘉夫 力武卓治・二宮忠司・山崎純男(前任)

主任文化財主事(現調査第2係長) 常松幹雄 米倉秀紀・濱石哲也・松村道博・

池崎謙二(前任)

主事 池田祐司 上角智希・木下博文・菅波正人・星野恵美・小林義彦・久住猛雄・
松浦一之介・屋山洋(前任)

調査補助 小杉山大輔・西村直人・櫛山範一・石橋忠治・濱石正子・水崎るい・
撫養久美子

整理補助 上方高弘・甲斐田嘉子・鳥井幸代・長野千重

(5) 調査工程と作業方法

発掘調査は、確認調査で遺跡の範囲と推定された全域が対象であった。まず谷奥部の約 6,000m²（調査 1 区）から実施した。重機により表土～上部埋土の除去を行い、排土を調査 2 区側に仮置きした。除去した谷部中央の堆積物は表土から最厚 3 m に達し、大型重機数台を利用し約 1 ヶ月を要した。また調査 1 区では谷部の包含層が厚く、遺構面や遺物量も多く、調査期間は 1 年 8 ヶ月に及んだ。調査 1 区の作業終了後、調査 2 区に仮置きした残土と表土を合わせて調査 1 区に反転して仮置きした。この作業は土量が多く、数台の大型重機を用いて 1 ヶ月以上の長期の時間を要した。調査 2 区の面積は約 8,000m² となり、発掘調査にはおよそ 8 ヶ月の調査期間を要した。調査 3, 4 区については作業工程に合わせて随時掘削し、合計約 2,800m² の発掘調査となった。こうして調査総面積は約 16,800m² となり、同様の谷部調査であった 7 次調査の 2 倍以上の面積、倍以上の遺物量や遺構面を検出し、掘削高も調査前の地表から最大深度 5 m 強に達した。

なお、調査中は常に谷部から湧水があり、調査区内に水路を設けて排水処理をしていたが、梅雨期の降雨時に多量の出水が発生し、河川汚濁を生じてしまった。このため以後の対策について都市整備局と協議調整を行った。試行錯誤の結果、調査区と河川（大原川）との間の空地に二段階の集水槽と攪拌槽、枠形の水路を設け、水中ポンプと污泥凝固作用のあるポリ塩化アルミニウム（PAC）溶剤を利用した汚濁水浄化装置を設けて対応をおこなった。

(6) 18 次調査区の調査の方法 (Fig.5)

発掘調査にあたっては、周辺移転用地内に設置されていた三等測量基準点から調査区内に測量原点を移動した。またこの原点を利用して、調査区内に 20 m 単位で、公共座標点（日本測地系）と共に通轍線上となる測量基準点を設けた。調査区内はこの測量基準点を基本に 10 m グリットを設置した。グリットは東から西へ A、B、C …、北から南へ 1、2、3 … とし、交点グリットは例えば K20 グリット（区）と呼称した。本次調査では A から T グリットまでの東西 200 m、1 から 26 グリットまでの南北 260 m の範囲が対象となった。なお調査 1 区の中央で確認された造成谷部遺構 SX100 は規模が大きいために、遺構の主軸に合わせて別に 10 m グリットを設定し、上流側から A、B、C …、上流側から見て右岸側を 1 区、左岸側を 2 区として、例えば SX100-A1 区と呼称して地層観察や遺物取り上げを行った。同様に調査 2 区の谷部遺構 SX404 は、土層ベルトを基準として 1 区画ごとに I、2、3 区と呼称して、例えば SX404-1 区と呼び、地層観察や遺物取り上げを行った (Fig.5)。また調査 2 区の東側斜面に段造成されたテラス状遺構は上段から I、II、III …、下流側から a、b、c … として、例えば II c テラスと呼称して遺構実測や遺物取り上げ時に用いた。

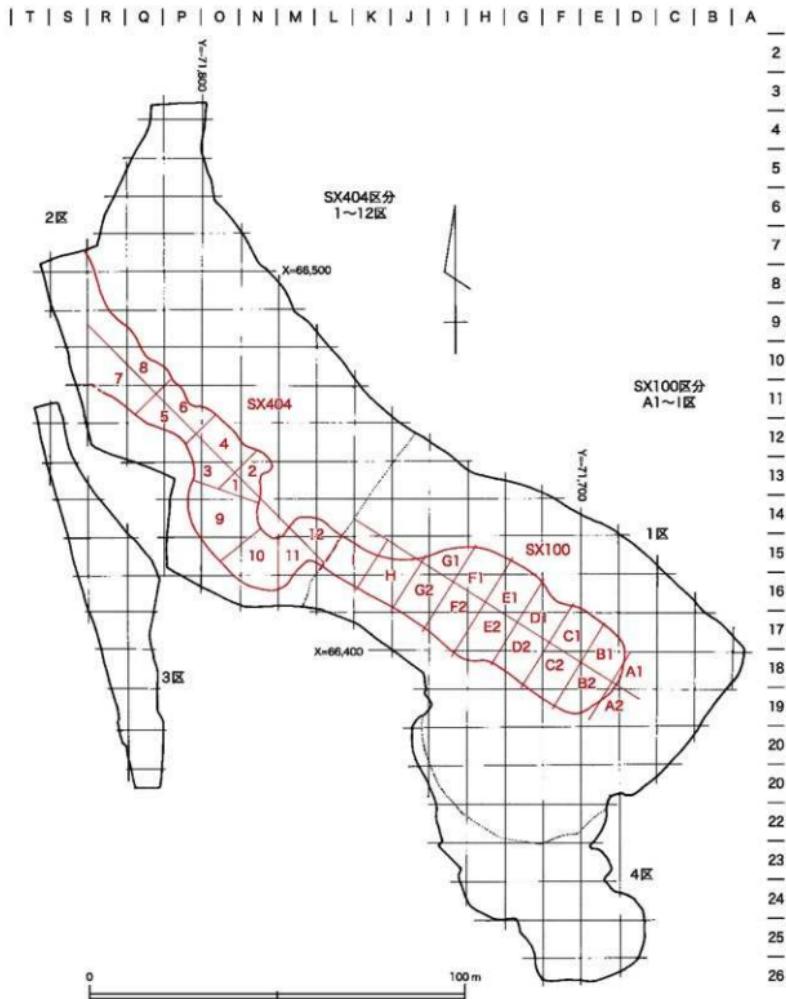


Fig.4 18次調査区とグリッド配置図 (1/1,000)

2 第9次調査の記録

(1) 概要

調査の経過と概要については1-(3)で示した。当初9次調査で設定したI、II調査区のうち、I区の報告である。II区は同じ尾根線上を西に向かってトレーナーを設けたが、何らの遺構、遺物を検出しなかったので、ここでは取り上げない。なお、I区周辺に点在し、住居跡を切って掘り込まれた土坑には近世大甕片が埋設されている。多くの土坑には二次的掘り込みがあり、改葬時の掘削と推定した。また、土坑の東斜面にて戒名が刻まれた自然円礫利用の墓石が出土した。墓石には前面に戒名のみが刻まれ、命日などはない。戒名は「音空持海和尚」とあり、現在大字元岡字下之谷にある大徳寺派本岳寺の歴代住職の一人であることが判明した。しかし、現住職並びに檀家の方にお聞きしたところ、この墓地は少なくとも明治期以降は利用されず、かつて同寺の墓所であったが、墓地移転と共に早く改葬されたのだろうとのことであった。出土した墓石については同寺に引き取っていただいた。

(2) 地形と基本土層

元岡、桑原の中央に連なる石ヶ岳(99m)～水崎山(95m)山塊は基盤が花崗岩であり、浸食により樹枝状の丘陵を形成している。そのうち、本調査地点は南東側に派生する丘陵上に位置し、幅の狭まつた丘陵の先端で、標高約37m付近にあたる。調査地点からの眺望は良く、丘陵先端から北東～南側方向は広く糸島平野全体、そして今津湾から博多湾まで見通すことが可能である。逆に外海への北東～西～南西方向は山塊に阻まれ視界が利かない。

この丘陵の基盤は花崗岩であり、上部が媒乱土化している。調査時には表土である腐植土直下はこの媒乱土であり、住居内埋土は褐色の風化土であった。住居形成時の堆積環境は残存していない。

(3) 遺構と出土遺物

SC001

本住居跡は調査区中央の標高36.5m付近に位置する長軸長5m以上、短軸長3m以上、深さ0.3m以上の長方形堅穴住居である。長軸は尾根筋と平行する東西方向である。住居の北側と東側が失われているが、本住居跡は弥生時代後期に一般的な2本主柱の堅穴住居である可能性が高く、本来の規

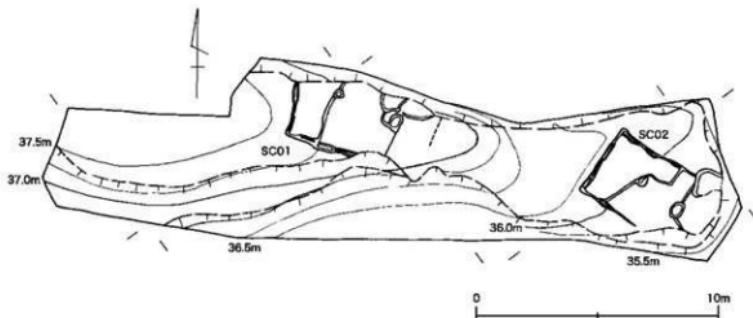


Fig.5 9次調査地点の遺構検出状況 (1/200)

模は長軸長 6 m 前後、短軸長 4 m 前後と推定できる。住居内の両短辺側には、地山加工によるベッド状の高まりがある。その段差は 5 ~ 10cm 程度である。住居床面の大部分は地山加工面であるが、部分的に貼床が施されている（5、6 層）。住居内の西辺と南辺には幅 20cm 前後、深さ 5 ~ 10cm 程度の壁溝がみられる。住居内の柱穴は主柱と考えられる 2 基のみが、2.6m 間隔で東西方向に並ぶ。ベッド状遺構と若干重複する位置である。西側の柱穴は、直径約 40cm、床面からの深さ 15cm である。東側の柱穴は直径（1 辺）約 90cm あるが、柱が据えられていたと考えられる下段の掘り方は 50 × 68cm で、床面からの深さは約 25cm である。

出土遺物は、住居埋土や東側柱穴内などから出土した弥生土器で、9 点図化することができた。1 は広口壺で、2 は同一個体と考えられる胴部破片である。住居埋土と東側柱穴内から出土。口径 16.2cm（口縁周り約 1/6 の遺存）で、胎土に 1 ~ 3mm の砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈する。外面は縦方向のハケメ調整で、口縁部や頸部付近にはヨコナデ調整が入る。内面は、口頸部が横方向のハケメとナデ調整、胴部がユビナデ調整主体である。3 は、住居埋土出土の壺口縁部小片である。二次口縁の剥離痕跡があり、垂下口縁の広口壺（近畿等の外来系）である可能性が高いと考えられる。胎土に 1 ~ 3mm の砂粒を一定量含み、色調は暗赤褐色を呈する。4 はく字口縁の壺で、5 は同一個体の底部である。胴部破片も一定量存在するが、復元・図化は困難である。住居埋土から出土。口径 17.6cm、底径 4.6cm（口縁周り約 1/10、底部周り約 1/2 の遺存）で、胎土に 1 ~ 3mm の砂粒を定量含み、色調は暗赤褐色を呈する。器表面の摩滅が著しく、調整は不明瞭である。6 は壺の可能性が高い底部である。住居埋土から出土。底径 6.6cm（底部周り約 1/4 の遺存）で、胎土に 1 ~ 3mm の砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈する。器表面の摩滅が著しく、調整は不明瞭である。7 は鉢である。住居埋土から出土。口径 15.6cm（口縁周り約 1/5 の遺存）で、胎土に 1 ~ 3mm の砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈する。外面はナデ調整で、内面は横方向のハケメ調整の後、ナデ調整が施される。8 は頸部復元径 31cm の大甕である。住居埋土出土。胎土に 1 ~ 3mm の砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈する。外面は頸部突帯付近が横方向のナデ調整、胴部が縦方向のハケメ調整で、内面は胴部にハケメ調整やユビオサエの痕跡がみられる。9 は高杯の口縁部である。東側柱穴内から出土。小片の復元実測であるため、法量や傾きにやや不安があるが、復元口径 26cm を測る。胎土に 1 ~ 3mm の砂粒を定量含み、色調は赤褐色を呈する。器表面の摩滅が著しく、調整は不明である。

以上の弥生土器は弥生時代後期後半のいわゆる下大甕式に該当するが、高杯の型式などからその新段階に当り、住居の存続時期を示すものと考えられる。

SC002

本住居跡は調査区東部の標高 36.2m 付近に位置する長軸長 4.5m 以上、短軸長 3.1m、深さ 0.5m 以上の長方形竪穴住居である。長軸は尾根筋と平行する東西方向である。住居の東側が失われているが、本住居跡は弥生時代後期に一般的な 2 本主柱の竪穴住居である可能性が高く、本来の長軸長は 5.6 m 前後と推定できる。住居内の西北部と北東部には、地山加工によるベッド状の高まりがある。北東部の段差は 5cm 程度であるが、西北部は 10 ~ 20cm ある。住居床面の大部分は地山加工面である。住居内の西辺、北辺と南辺の一部には幅 20cm 前後、深さ 5 ~ 10cm 程度の壁溝がみられる。住居内の柱穴は主柱と考えられる 2 基のみが、2.0m 間隔で東西方向に並ぶ。ベッド状遺構と若干重複する位置である。西側の柱穴は、径約 30 × 50cm、床面からの深さ 15cm である。東側の柱穴は径約 50 × 70cm、床面からの深さ 7cm である。

出土遺物は、住居埋土から少量出土の弥生土器で、図化できるのは 1 点のみ、壺とみられる底部

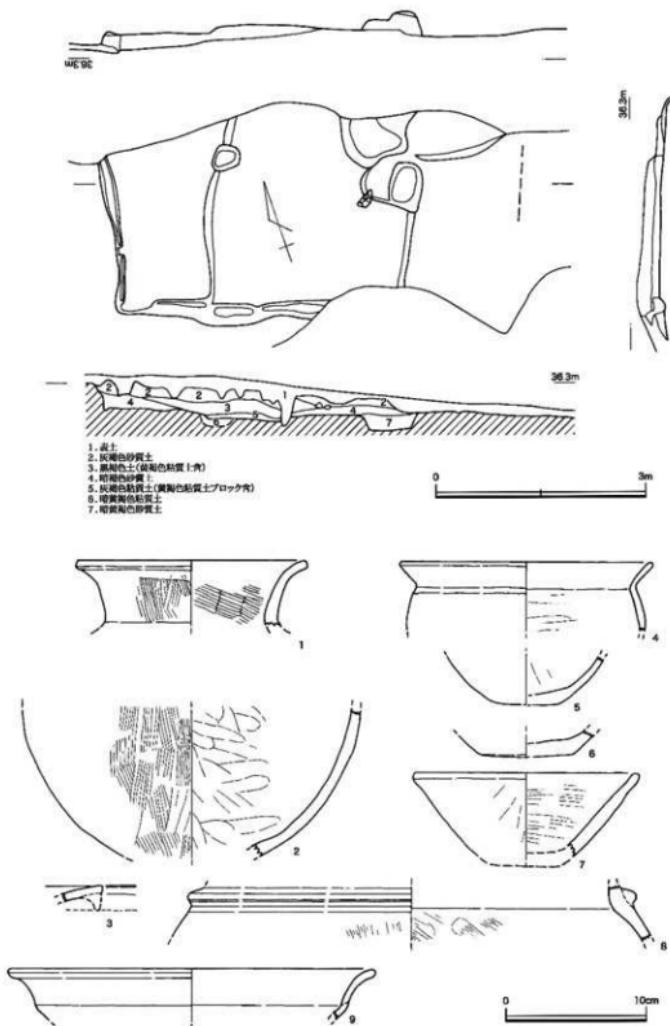
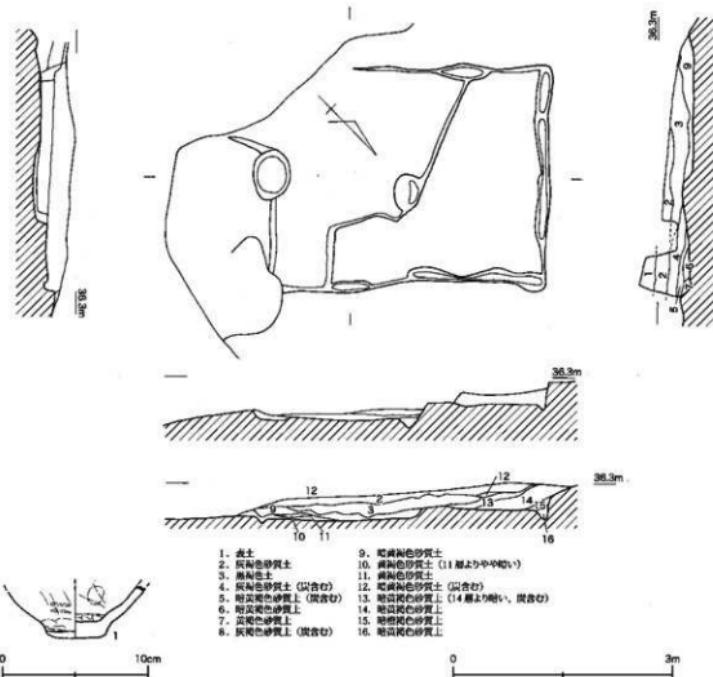


Fig.6 SC001 と出土遺物 (1/60, 1/3)

がある。突出底を特徴とするいわゆる近畿V様式系土器である。底径3.8cm（底部の約95%の遺存）で、胎土に1~3mmの砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈する。外面は二次的な被熱により赤変している。外面はナデ調整であるが、成形時のタキキやオサエの痕跡がみられる。内面もナデ調整で、成形時のオサエの痕跡が底面を中心にみられる。



SC002は、出土土器が少量であるが、以上のようなV様式系土器の存在からSC001に後出する弥生時代終末期の西新式段階である可能性が考えられる。

(4) 小結

第9次調査は、当初古墳群の調査を想定していた。しかし、結果的には近世墓と弥生時代後期の住居跡2棟を検出し、古墳は存在しなかった。周辺地形は近年の土砂採掘のために大きく旧地形を失っているとはいえ、明治33年の地図や現地の状況から見ると、本来幅数～8m程度のやせ尾根であり、丘陵上に集落が展開できるほどの平地は当初から存在しなかったようである。住居跡は2棟存在するが、同時期に存在するのは1棟であり、弥生時代後期後半から終末期にかけて、1棟ずつが建代わったとみられる。沖積低地との比高差は約30mもあり、周辺集落の一部とも考え難い。眺望はよく、旧今津湾や糸島平野の全体、博多湾を超えて福岡平野の北部も遠望が可能である。こうした集落、あるいは孤立した居住施設については、三苦永浦遺跡J地区（第476集）の検討の際にも触れたが、広範囲に展開する「高地性集落」と呼ばれる遠見や連絡網の一部を構成する施設とも考えられる。今次調査はこれまでの北部九州の例が弥生時代中期後半に集中するのに対し時期が異なる。新たな問題も残るが、さらに今後の関連遺跡の調査が臨まれる。